大力の黒牛と貨物列車の話

もと二本木村に非常に強いという評判の牡牛がいた。じっさいにその牛がどの程度強いのか、かつてみた者はなかったのだが、火のないところに煙は立たないということわざがあるからには何か強いところがあったのだろう。ほんとうのところをいうと本人でさえ自分がはたしてうわさのように強いのかどうか知らないのであったけれども、そういううわさを立てられて悪い気がするはずはないのであえてとり消そうとはしなかった。世間がああいうからには、自分は人なみすぐれた力持ちなんだろうくらいに漠然と考えていたのである。ところで、牛が生物であるように、うわさというものもこれまた生命を持っている。そしてうわさの生長力の旺盛さにいたっては牛などの比ではない。うわさの生長の迅速にしてはてしないことをくわしく知りたいと思う人は有名なアイルランドの劇作家グレゴリイ夫人の書いた劇の中に、そのテーマをとりあつかったものがあるからそれについて親しくみられるがよい。さてうわさの方は非常な迅速さで生長してゆきともすると牛の方でおくれがちであった。昨日牛は、自分がこの二本木の村でいちばん強いといううわさにでくわし、急いでその気になっていると、もうそのうわさが今日はとほうもなく生長してしまって、なんでもこの牛に匹敵するものはまず近郷近村に一ぴきとあるまいというようなことになっているので、当の牛の方で面くらってしまうしまつであった。しかしともかく牛は、なんといっても自分の名誉になることだから、汗を流しながらうわさのあとを追っかけていったというわけである。

ところがある日のこと、うわさの方が、急に生長をはばまれるという、牛にとってはおもしろくないことが起こった。

かいつまんでいうならば、このころ二本木から半道ほど北をとおって西東に通ずる鉄道がひらけ、一日に二三回汽車が走るようになった。当時汽車は陸蒸気という古風な名でよばれ、お狐さまか天狗のように百姓たちの恐怖と好奇心をそそった。そこで恐怖心も強いが好奇心も強いという三四名の若い者たちが、腰に弁当をさげて陸蒸気の正体をみとどけに出かけた。そして、自分たちの身を危険からかばいながら、じゅうぶん好奇心の方を満足させうる位置――つまり、山のきりどおしの三町ほど先に鉄道線路がすこしみえるところに陣どって、半日ばかり待ち通し、ついに陸蒸気をみたのである。遠くの方から地震のような前ぶれで近づいてきて、きりどおしの先を、そうぞうしい咆吼でゆきすぎていった陸蒸気は、いかりくるって土堤の上をかけすぎてゆく黒牛を彼らにおもわせた。そして黒牛の一ぴきや二ひきではとてもかなわないもののように思えた。そこで彼らは村に帰ると彼らの生命がけでみた怪物についての感想を、しごく率直にいいあらわしたのである。「与ささあの牛でもあいつにゃかなわねえずら。」

それをきいた与ささあの黒牛は、名声の落ちてゆく英雄の悲哀を如実に味わった。彼は当然自

分の敵手である陸蒸気を憎悪した。陸蒸気とはいったいどんなものだろう。彼はさまざまにまだみぬ自分の敵手の姿を想像したが、牛の想像力といったってたかが知れている。あるときは壁のような姿で陸蒸気は牛の脳裡にうかんだ。またあるときは牛が坂をのぼるとき強大な力で背後へひきもどそうとするあの石材の積荷の姿で。とまれ与ささあの黒牛は、陸蒸気をたおし、ふたたび以前の名声をとりもどさなければならないとかたく決意していた。

汽車にぶつかって汽車をたおす。なんというばかげた考えだろう。いまなら、それを口にするだけで物笑いの種だが、何しろ私のおじいさんの若かったころである。牛でいうと、ゆうに十代ばかり前の、つまり大むかしのことである。いまでは牛もずいぶん賢くなったけれど大むかしには、そういうばか牛もいたものだ、と牛仲間ではいっている。

機会はまもなくやってきた。黒牛はアンジョウのステンショへ木材をひきにゆくことになった。牛は話にきいて、アンジョウの停車場では走ってきた陸蒸気がしばらく休憩することを知っていた。突進してくる相手を敵しがたく思ったなら、相手がねそべってうつらうつらと休息している虚をついて、どてっ腹に風穴をあけるというてもあるのだと、そのころの牛としては頭のよい計画をひそかに胸にいだいて牛は二本木を出発したのだった。

牛はまだ陸蒸気について確とした観念をもっていなかったので途中で二三度へまをやった。アンジョウの村に近くなったとき、向こうから黒い四角な、たちの高いものが人間につれられてやってきたのをみたとたん、彼はこれが音にきく陸蒸気だなと早合点し、これくらいの物ならすれちがいにおしたおすことができるという自信をいだいて、すでに地に近く頭までさげたのであった。だが念のためたしかめておく必要があった。そこで彼は与ささあにたずねたのである。「向こうからくるのはきっと陸蒸気というものにちがいないからして、自分はあれをひっくり返すつもりであるがよろしいか。」すると与ささあはつぎのように答えて牛を失望させた。「何をうろたえてけつかるだあ。村長さんののってござる人力車がおいでたじゃねかっ。」それからアンジョウの村の中にはいるとさらに牛はばからしいへまをやった。玩具の風車を持って小さな子どもがのっている乳母車を陸蒸気と感ちがいしたのである。これでみると、与ささあの黒牛は内心陸蒸気をひどくおそれ、しかもそれをひたかくしにかくそうとつとめるという、心理的錯乱状態にあったというのが至当だ。

牛は生まれてはじめてステンショというものをみた。だが彼はいま自分がつれられてきた建物が、音にきくアンジョウのステンショであると、すぐ認識することはできなかった。何しろ牛は大して聡明ではない。その上与ささあの黒牛はそのとき前述のような興奮状態にあったのである。彼は漠然と、いつもとはかわったところにきたことを感じていたにすぎない。黒い木の柵が長くつづき、その向こうにはこれまた長い鉄の棒が横たわっている。こういうものもいつかどこ

かでみたことがあるような気もした。ともかく、彼はぼんやりしながら柵のある箇所につながれていた。

まもなく牛は右手の方がなんだかそうぞうしくなってくるのを感じた。そっちをみると、線路の上に黒い牛みたいなものがあらわれ、腹の下から両側へ、まっしろな煙をはいていた。はじめあまり大きくないと思ったが、みているとそれが、すばらしい速力でこちらへ走ってきて、またたくまに巨大な牛（と牛は思った）になった。

与ささあの黒牛は、かあっと頭に血が逆上するのを覚えた。牛みたいなものにも、とっさの場合にはインスピレーションのような精神作用がはたらくとみえ、だれも説明してくれなかったが、この怪物こそうわさに高い陸蒸気であって、それ以外のなにものでもないということそして自分はとうていこの大牛にはかなわぬ、ということを確然とさとった。

怪牛は与ささあの黒牛のはらの中をみぬいているもののごとく、はげしく歯がみをしながら、まっしぐらに彼の方へ突進してくる。

ああ、このままじっとしているとやられてしまうぞと黒牛が思ったとたん、怪牛の方で、ヒューッというすごい吼声をあげた。吼声はするどく黒牛の体につきとおって、ぴょこんと彼をはねあがらせた。

その跳躍が、怪牛を眼にした瞬間から黒牛にかかって彼を動かさなかったところの呪縛をといた。とさいわい、柵に軽くゆわえてあった手綱もとけた。与ささあの黒牛は空車をひっぱったまま、あらんかぎりの力でステンショからにげ出したのである。

しばらくのうちは、がむしゃらに走ろうという想念以外には何もなかったが、そしてまたがむしゃらに走ったが、やがて、彼をさける人びとがおったまげて悲鳴をあげるのに気がつき、と同時に、自分は主人に使われている身分であるが、その自分が主人に対し申しわけのないような大それた失策をしてしまったという想念がうかんだ。

だが、人間にしてもそうであるけれども、牛には、とりかえしのつかぬ大失策をしてしまったというはげしい後悔の苦しみをきらう傾向がある。できるなら後悔をはぐらかしてしまいたいのだ。だから牛は、もう身の安全をじゅうぶんに知っていながら、強引に町の中を走りつづけていた。

ちょっと余談になるが、私のいとこの大吉が今年冬関東軍に入営することになった。なにぶん田舎の小さい村のことだから、さあ入営となると村中総出の大さわぎである。同じ村からほかに六名いっしょにゆくのであるが、大吉が総代になって村の人びとに挨拶をした。八幡様の境内にいっぱいつまっている村人に向かって、拝殿の前の石段の上から、彼は血をはくような声で悲痛にしゃべった。いつも入営者応召者がこういう場合にいうところのごくありふれた文句なのであるが、彼はそれをしゃべってしまうと、ひとりで敵国をほろぼしてしまわねばならぬような責任

感をいだいたらしい。さらに町の停車場への路のかたわらで、停車場を出て連帯所在地へつくまでの汽車のゆく先々で、大勢の人びとが手をあげ旗をふって見送るのが、いやが上に彼の感激しやすい心をかきたて、もうどうしても戦死して帰らねばあいすまぬという義務観念にみたされたのである。

大吉を送り出したあとの家では、私たちが内心びくびくしながら二日くらした。というのは大吉は五年前に軽度のものではあったが肺尖をわずらったことがあるので乗船前の身体検査ではねられはしないかと気づかったのである。はたして、二日目の夜大吉からつぎのような電報がきた。

「ペケ　ザンネン　シニタシ　ダイ」家では、ぺけになったら世間さまに申しわけないからきびしく大吉をしかりつけようと協議してあったのだが、この電報は一同を不安にかりたてた。お国のお役に立たず、その上死なれては大いに困るのである。すぐに大吉の父親が私の兄といっしょに彼のまだいると思われるところへ飛んでいった。

つぎの日一日、あとにのこった者たちは昨日にます不安の中に、いても立ってもいられなかったが、夜になっても大吉は帰らず、探索隊からはなんのたよりもなかった。私たちはもうなかば大吉は死んだものと思っていた。

母親などは、はじめから大吉が即日帰郷になったら詰責するという決議には賛同しなかったけれども、事態がここにいたるといっそうめめしくなって、大吉の男ぶりのよいことまでいい出してわが子をおしむしまつなのである。

そういうところへ、夜半の十二時近く、戸をたたきもせず、隙間から小さな声で、おいおれだよとおとなうものがある。大吉が帰ってきたのである。一同の喜びようはどんなであったか、はずかしくてありていに書く気になれない。

あとから大吉にきいたが、彼は即日帰郷を命ぜられたとき、実際深く残念に思った。大勢の人びとにはげまされ、たのまれてそこまできたことを思うとまったくやりきれなかった。しかし、それだから死のうと考えるほどあほうではなかったそうである。死んだってなんのお役にも立たないのだからと彼は理由を正しく説明した。ではなぜ、あんなびっくりさせるような電報を打ったのかと私がなじると彼はにやりと笑って、家へうまく帰りたかったからだよと本音をはいた。

実際、人をくったやり方である。うるさい親父たちの度胆をぬく、そこへ帰ってくる、しかられなくてすむ、これだけを計算してあるのだ。

さて、与ささあの黒牛も、町のまんなかをつっぱしりながらこのてを考えたのである。彼はどこかの商店へ飛びこむというような大椿事をひき起こせば、人びとの注意をそちらに向け、自分の敗北、曝露された小心がカモフラージュできると計算したのである。

よし、商店に飛びこもう！　と決心はしたが、どの店に飛びこむかということが、また問題だ。

最初に眼についたのは金物屋である。店の内側の天井には鋸のたぐいがたくさんつるされ、下には、出刃、錐、のみ、鋏、どれも体を傷つけるような物ばかりがならんでいる。そういう物の中へもぐりこむことを与ささあの黒牛はこのましいと思わなかったので、つぎに眼をうつすとこんどは牛肉屋である。与ささあの黒牛のみならず、すべての牛が牛肉屋をきらうのであるが、それは同胞の肉塊があるいはかぎにひっかけられ、あるいはきざまれているのをみるいたましさにたえられぬというほどの、センチメンタルな理由からではなく、牛仲間の論理の単純性に由来するのだ。つまり彼らはこう考える。牛肉屋には牛の肉がつるさがっている。自分たちは牛である。だから牛肉屋にはいれば自分たちもああいう具合に皮をひんむかれ、眼も鼻も耳も角も口もとられてしまう。で与ささあの黒牛は牛肉屋の前を走りすぎた。そのつぎには床屋があった。

床屋。これはいい。与ささあの黒牛はかねてから一生のうちいっぺんでよいから床屋にはいってみたいと思っていた。バリカンで頭髪をかったあとで、床屋が茶碗型のくしでもって、バリバリと頭をかくのは、かかれる者にとっていかなる快感であろうかということは、牛がときたま川っぷちにつれてゆかれ、おカメたわしでもって頸や背中をこすってもらうときの気持ちから容易に察することができるのである。床屋の客になる人間たちのように、ひじのついたいすの上にゆったりと腰をおろし、白いさっぱりした被布でおおわれ、いつもかゆみのたえない角のつけねのあたりの毛を短くしてもらったあと、あのくしで心ゆくばかりかいてもらう。牛は床屋の前を通るたびにそれを空想し、そのつどにうっとりとなったものである。でとりあえず与ささあの黒牛は床屋へ飛びこむことにしたのであった。

床屋はちょうどひまなときで、亭主は好物の棒飴を口にしたままあおむけになって昼ねしていたが、ものすごい破壊音のために耳をさまされた。このようなひどい音ではいってくる客というものはめずらしいけれどもいったいだれだろうといぶかりながら、やおら半身を起こしたが、客をみてなっとくできた。しかし彼は剛腹な侠客肌の男であったからおどろきはしなかった。なめかけの、紅白だんだら模様のねじ飴を手に持つと、きょとんとしている牛のところへ歩みよって、坊よ、坊よ、ここはおめえのくるところじゃねえよ、さ飴をやるから出ていきな、といったのである。

牛は口におしこまれた飴をにんじんと思ってかんでみると、奇妙なものである。歯ににちゃついて、いかなる草やこくもつよりもたべにくい。そして甘たるいものがとけてくるのが著しくいやだ。はき出そうとしたが歯にねばりついていてとれない。床屋なんかにきて失策った、こんなことなら八百屋にはいった方がよかったと牛は残念に思いながらすごすごと床屋を出た。

まっさおになった与ささあが、息をきらせて飛んできて、床屋の亭主にあやまり出したのは一分とたたないうちのことだった。侠客肌のある亭主は、なあに分別のねえもののしたことだしかたねえよ、と太っ腹をみせていたが、眼に角を立てて出てきた女房のいい分もいれて、店の損害

賠償だけはしてもらうことにした。金額みつもりにさいして、床屋は五百円でよいといい、与ささあは二百円くらいとふみ、なかなか話がきまらず、与ささあと床屋の女房は声もあらくなってきたが、亭主はあくまで腹の大きいところをみせ、なあに、五百両いただきゃあなんとかなるだあ、はっははっと笑ったりするのを、黒牛は表から、興奮のひいたあとの甘い物悲しい感傷にひたりながらぼんやりみていたのである。

私のいとこの大吉のやったと同じような、与ささあの黒牛のこの計算もある程度成功し、さしあたっての目的は達せられたが、村に帰ればまた黒牛の悩みはあるはずだった。陸蒸気をみてにげたとうわさするにきまっているからだ。だが彼は、そのときはこういって弁解しようと考えた。

「卑怯にもほどあいというものがあるじゃらに、あいつは一ぴきで向かってこなんだだ、三十ぴきくらいつながってうせただ。」

さてこのばからしい昔話の結末だが、ロシアの民話の結末がたいていみな同じであるように——それはこうだ、「こんなふうにしてイワンは美しいお姫様を救い、ふたりはめでたく結婚しました。私も結婚式にまねかれていって、蜂蜜をたんまりご馳走になりましたが、ひげをつたってこぼれてしまい、一滴も口にははいりませんでした」——牛の話というものもだいたい結末はきまっている。ロシアの民話をまねていえばつぎの通りである。

「そこで黒牛は屠殺所でめでたくなってしまい、私もそのご馳走をいただいてみたが、歯が弱いせいか、かみきれないので困りました。」

ちなみに、床屋の俠客肌の亭主は、紅白だんだら模様のねじあめを牛の口におしこんだとき、牛がいやな顔をして店を出ていったのをみて、牛はあの飴がきらいであるとみてとり、その後牛よけに、店の前に飴をかたどった棒をたてることにした。そして全国の床屋が集まった同業組合会議席上で、彼がその牛よけのききめのあることを発表したことから、いまでは全国の床屋が彼のまねをするようになったと、牛仲間ではいっている。

底本　＊『新美南吉童話集　3　花のき村と盗人たち〔新装版〕』
著者　＊新美南吉
出版社＊大日本図書
出版年＊二〇一二年十二月一日　第一刷発行
入力に使用＊二〇一二年十二月一日　第一刷発行
入力　＊安城市図書情報館職員